博士（文　学）　齋　藤　貴　之

学位論文題名

伝統社会の変化と生存

－インドのビシュヌプル市と日本の秋田県の鍛冶職に関する比較研究－

学位論文内容の要旨

本論文は、インドのビシュヌプル市と日本の秋田県の鍛冶職を営む鍛冶集団を対象とし、伝統社会の変化と生存戦略を明らかにすることを目的に、人類学的視点から分析、考察したものである。そのため、インドおよび日本における鍛冶職研究に関する文献の渉猟、2002年から2003年における日本の秋田県でのフィールド調査、2004年から2006年におけるインド、西ベンガル州、ビシュヌプル市でのフィールド調査による収集資料に基づき、両鍛冶集団の変化の実態と生存戦略について比較分析した。

序章では、本研究の観点と方法、これまでの鍛冶職研究に関する文献資料について検討している。フィールド調査に基づき、物質文化の生産者である職人を対象とした比較研究を試みることによって、それらが属す社会集団の変化と人間の生存戦略を明らかにすることを本研究の目的とし、インドのビシュヌプル市の鍛冶集団と日本の秋田県の鍛冶集団を比較検討することを提示している。また、調査地の概要や歴史という伝統社会の背景についても記載する。

第1章では、ビシュヌプル市で確認された鍛冶職を伝統的職業とする863人のカルマカル・カーストを対象とし、フィールド調査によって得られた情報をもとに、社会の内部構造、構成員と鍛冶職との関係を明らかにしている。本論文の研究対象は鍛冶集団であるが、インドの鍛冶集団は、鍛冶職を伝統的職業とするカーストと深く結びついているため、カルマカル・カーストに焦点を当て、その解明を行っている。内部構造については、ビシュヌプル市のカルマカルの間には17の下位区分名称が存在するが、カースト内での婚姻の割合は非常に高いにもかかわらず、下位区分名称内での婚姻や、地理的分布や製品区分、真鍮鍛冶と鉄鍛冶といった区分に基づく同族集団内での婚姻の割合は比較的低いことから、現状では、そうした内部構造が強固ではないことを示している。一方、鍛冶職との関係については、鍛冶職を「最低限度の生活保障」として考えているというカルマカルの職業意識から、6割以上のカルマカル世帯が鍛冶職に関わっていることを示している。本章は、これらの成果を示すことにより、研究対象を鍛冶職に従事している者に限定する役割を果たしている。

第2章では、ビシュヌプル市内で確認された66軒の鍛冶職を対象とし、2004年から2006年にかけて行ったフィールド調査をもとに、鉄を用いる鉄鍛冶と真鍮を用いる真鍮鍛冶と

いう 2 つの鍛冶職を区分し、一貫制生産構造（地域密着型）と分業制生産構造（都市集中型）という異なる経済的、社会的構造が存在することを明らかにし、それらの生存戦略に果たす役割について考察している。一貫制生産構造は、変化に対応する機会の多かった鉄鍛冶に見られ、工業製品の修理や改良を請け負うというように新たに形成された仕組みに加わるほか、状況の変化やそれによって生じた新たな需要に適応した結果として形成され、営業の継続を図ることを可能にするものである。他方、分業制生産構造は、真鍮鍛冶に見られ、製作、販売、修理というように仕事を分業制で行うものである。しかし、その構造は変化に対応する機会を少なくし、個々に変化に対応することを困難にさせるため、生存に向けた新たな動きを妨げるものとなっている。これにより、鉄鍛冶集団における経済的、社会的構造が変化に対応可能であり、その生存に大きな役割を果たしていることが明らかにされた。

第 3 章では、鉄鍛冶とその利用者との関係を明らかにするため、ある 1 軒の鉄鍛冶に訪れる利用者約 100 人に対して聞き取り調査を行い、さらに、調査地の市内で出会った約 100 人の住民に対して聞き取り調査を行った。その結果、農業従事者がビシュヌプル市中心部の鉄鍛冶を利用することはほとんどなく、市内中心部の鉄鍛冶の主要な仕事は、ビシュヌプル市内の織物業などの伝統産業からの修理や研ぎの依頼であることが明らかにされ、鉄鍛冶の地域密着型、一貫制生産構造の実態が解明された。

第 4 章では、インドのビシュヌプル市の鍛冶職集団に関して明らかにされた資料と、日本の秋田県におけるフィールド調査から得られた資料に基づき、ビシュヌプル市の鍛冶集団と秋田県の鍛冶集団（野鍛冶）に関する比較研究を行っている。秋田県の鍛冶とビシュヌプル市の鉄鍛冶をとりまく状況の間には、鍛冶の利用者や鍛冶製品の使用者が減少しつつあるという類似点が見られ、両者の変化への対応にも、商圏の拡大や新たな販売方法を試みるという共通性が最近見られるようになってきている。しかし、秋田県の鍛冶の多くが今でも、徒弟奉公制という修業を通して養われる伝統技術に対する自信とこだわり、および利用者と鍛冶との緊密な関係を重視するという職業意識によって、工業製品やその販売店と一線を画し、伝統を維持する方向をとり、他方、そうした修業過程を有しておらず、カースト制に基づく職業を最低限の生活保障と考え、機会を最大限に生かし、利用者と鍛冶との関係も希薄であるビシュヌプル市の鉄鍛冶が、工業製品の修理を請け負い、新たに形成された仕組みに加わるという相違が見られる。このように、両者の生存戦略はまったく異なる方向を向いていることが明らかとなった。結果的には、この相違が、秋田県の鍛冶職が急激な減少に至った要因の一つであることを示すものである。

最後に、終章では、本論文の総括を行っている。ビシュヌプル市のカルマカル・カーストにおける鍛冶集団と秋田県の鍛冶集団の変化と生存戦略を比較することで、職業意識といった両者の間で受け継がれている文化的相違がそれぞれの社会の生存戦略に大きな役割を果たしていることが明らかにされた。そして、今後の展望として、多様な社会や文化に属す鍛冶集団の実態の比較研究を積み重ねていくことで、人間の生存戦略とそれぞれの社会的、文化的特徴の解明がなされることが提示される。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　煎　本　　孝

副　査　　助教授　　佐々木　　亨

副　査　　助教授　　結　城　雅　樹

学位論文題名

伝統社会の変化と生存

－インドのビシュヌプル市と日本の秋田県の鍛冶職に関する比較研究－

本論文は、インドのビシュヌプル市と日本の秋田県の鍛冶職という伝統社会の変化と生存戦略についての人類学的視点からの分析である。したがって、本論文は、我が国の人類学（文化人類学、生態人類学）分野では、従来十分な研究集積のなかった対象に関する広範、かつ詳細なフィールド資料の収集、分析、考察であると評価することができる。

また、インド国内における鉄鍛冶と真鍮鍛冶の変化に対する異なる生存戦略、さらには、インドと日本という異なる文化のもとでの鉄鍛冶集団の異なる生存戦略を抽出し、前者では、一貫制生産構造と分業制生産構造という異なる経済的、社会的構造が背景にあり、後者では、ともに一貫制生産構造を持ちながら、徒弟奉公制により養われる伝統技術に対してこだわりを持つ職業意識と、職業とはカースト制に基づく最低限度の生活保障であり、機会を最大限に生かすという職業意識の間の文化的相違が、生存戦略の相違に関与していることを明らかにしている。これらの成果は、文化人類学におけるテーマである伝統と変化の動態の解明、さらには、人間集団の生存戦略と文化との関係の解明に寄与するものと高く評価することができる。

ただ、本論文において、制度分析経済学や文化比較論など、より広範な領域における理論的関連性についての検証が十分ではないことなど、さらに必要とされる点が残されている。しかし、これは、今後の展開として期待されるものであり、本論文が示した学問的価値を損なうものではない。本論文が提示した鍛冶職集団に関する文化人類学的研究は、当該分野における今後の研究の推進に大きな意義を持つものである。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致で齋藤貴之氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。